

古英語の転換の特徴*

Characteristics of conversion in Old English

小原真子

(島根大学法文学部言語文化学科)

キーワード：語形成、古英語、転換、形態、意味

1. はじめに

現代英語では、名詞と動詞が同じ語形を持つ転換の例は数多く見られる。たとえば、Plag (2003: 107-108) が例示しているように、名詞 *bottle* から動詞の *to bottle*、名詞 *hammer* から動詞の *to hammer* など名詞から動詞に転換した例と、動詞 *to jump* から名詞の *a jump*、動詞 *to spy* から名詞の *a spy* など、動詞から名詞に転換した例があり、名詞から動詞、動詞から名詞の両方向で転換が見られる。

最も古い時期の英語である古英語では、転換は存在するのであろうか。英語の歴史の変遷を辿ることができる辞書 *Oxford English Dictionary (OED)* のオンライン版からのデータを用い、小原 (2024) では主に数値の面から、語全体に占める割合はそれほど多くないものの、*OED* で転換で生じたとされている語が古英語の時代から存在すること、転換の生成過程の方向性などを概観し、現代英語と同様に名詞から動詞に転換している語が最も多いことを観察した。本稿では、特に名詞から動詞に転換した古英語の実際のデータを観察しながら、形態的特徴と意味タイプの詳細について論じる。

形態面では、特に、語形成過程の中で対比されて論じられることの多い、屈折と派生の違いを中心に検証する。屈折は3人称単数現在形 *-s* や過去形 *-ed* など、動詞の活用で代表される新しい語を作らない過程のことで、派生は *-en*、*-ize* など接辞の付加によって、新しい語を作る過程のことである。本稿で扱う古英語の動詞が、屈折によって生じたものか、派生によって生じたものかを詳細に検討する。また、意味タイプに関しては、古英語の名詞から転換した動詞を Plag (2003) に提案されている動詞の意味タイプによって分類し、古英語の時代にも転換に特有の意味的特徴が見られることを論じる。

2. *Oxford English Dictionary* から見る古英語の転換

OED に掲載されている転換した語については小原 (2024) でも扱っているが、本稿ではより詳しくその性質を論じていく。なお、本稿で挙げる古英語の

例は特に断りがない場合は *OED* からの例である。まず、*OED* で転換によって生じたとされている語について、古英語の辞書である *Bosworth Toller's Anglo-Saxon Dictionary* のオンライン版を参照して語形や文法性を確認した。下記 (1) にあげているのが、*OED* で名詞から動詞に転換したとされる元の男性名詞 *smoca* (smoke)、中性名詞 *scip* (ship)、女性名詞 *lufu* (love) と、これらの名詞から転換した動詞の不定形の対応関係を示したものである。

(1) *smoca* (N, m.: smoke 煙)

→ *smocian* (V, weak: to emit smoke 煙を出す)

scip (N, n.: ship 船)

→ *scipian* (V, weak: to equip a ship 船を装備する)

lufu (N, f.: love 愛) → *lufian* (V, weak: to love 愛する)

これらの例から、古英語では名詞の語幹に *-ian* を付加することで動詞になるという関係にあることが分かる。

反対に、動詞から名詞に転換したとされている語でも同様の対応関係があり、次の (2) に見られるように、基本的に動詞から *-an* を削除することで、名詞が作られる。

(2) *plegan* (V, weak: to play 動く) → *plega* (N, m.: play 動き)

healdan (V, strong: to hold 支配する) → *heald* (N, n.: hold 支配)

feohtan (V, strong: to fight 戦う) → *feohte* (N, f.: a fight 戦い)

以上の例から、動詞と名詞は語形が異なるが、形態的にも意味的にも関係があることが分かる。

これらの古英語の名詞と動詞の関係をまとめると、(3) のようになる。名詞の文法性に関わらず、*scip* に代表される名詞に接辞 *-ian* を付加すると動詞の *scipian* になり、*healdan* に代表される動詞から接辞 *-an* を取ると、名詞の *heald* になる。

(3) a. *XN - ian* → *X-ianV*

b. *X - anV* → *XN*

これらの語形が異なる名詞と動詞の関係を転換と言って良いのであろうか。この点については、先行研究でも見解が分かれており、*Biese* (1941) はこれらの古英語の名詞と動詞の対応を転換ではない、と結論づけて、転換は中英語以降に盛んになった語形成過程だとしている。これに対して、*Marchand* (1969) や *Kastovsky* (2005, 2006) は古英語のこれらの対応関係をゼロ派生、すなわち転換であると論じている。また、次節で検証する形態面での関連において、

Kastovsky (2005) は英語の通時的変化から動詞の接辞 *-ian* を屈折接辞の一部として扱っていることが重要である。

本稿でも古英語の動詞の接辞 *-ian* や *-an* は動詞化を引き起こしている派生接辞ではなく、屈折接辞の性質を持っていることを示す。そして、*smoca-smocian* などの対応関係が転換だと結論づける。

3. 古英語の接辞 *-ian* は屈折接辞

本節では、古英語の転換に見られる接辞 *-ian* の性質について検討する。はじめに示したように、屈折は新しい語を作らない過程で、派生は新しい語を作る過程と定義されるものであるため、全く違う語形成過程のように見える。しかし、屈折と派生の区別については、境界があいまいだという議論があり、その対比について先行研究でも詳しく論じられている。ここでは、Plank (1994)、Haspelmath (2024) などに論じられている屈折と派生の区別を参考にして、古英語の接辞 *-ian* が屈折の特徴を持つことを確認する。

まず、古英語の動詞接辞 *-ian* が屈折接辞である根拠の 1 つ目として、屈折接辞は統語上で決定されるが、派生接辞は統語的には決まらないという点がある。(4) は現代英語の屈折の例であるが、(4a) のように、*She often* に続く動詞形は現在の習慣であるため、必ず *play-s* になる。一方で (4b) のように *yesterday* があると過去時制になり *play-ed* という過去形が使われる。これらの動詞の語形は統語的に決まるものであり、これ以外は使われない。これに対して、たとえば名詞 *character* に付加して動詞 *characterize* を作る派生接辞の *-ize* などは、名詞を動詞にするために付加するものであり、過去形や人称などの統語上の性質で語形が決まるものではない。

- (4) a. She often play*(-s) tennis.
b. He play*(-ed) tennis yesterday.

古英語の動詞の場合は、たとえば *lufian* (love) は (5a) に見られるように、主語が 2 人称単数であれば *lufast*、3 人称単数であれば *lufap*、過去形であれば *lufode* というように、統語的に語形が決まる。不定形は (5b) の例にあるように、後に助動詞になった動詞や知覚動詞の目的補語として使われる語形である。不定形の *lufian* の例も (5c) のように、現代英語とは語順が異なるが、助動詞の目的補語として使われていることが分かる。このように、*lufian* などの古英語の不定形は統語的に語形が決まるものであり、派生ではなく屈折であるということが出来る。

- (5) a. þu lufast /he lufaþ / he lufode
 you love / he loves / he loved
- b. ic geseah ða englas dreorige wepan.
 I saw those angels bitterly weep
 私は天使が激しく泣いているのを見た。 (橋本 2005: 144-145)
- c. Ðæt þú sóð godu lufian wolde
 that you real gods love would
 (Jul. 195., *Bosworth Toller's Anglo-Saxon Dictionary*)

第二に、屈折接辞はどのような語にも付加する生産的な接辞であるのに対し、派生接辞は生産的でないという違いがある。たとえば、現代英語では屈折接辞の 3 人称単数現在の *-s* は新しく形成された動詞も含めて付加するが、*black-en* など形容詞に付加して動詞を作る派生接辞の *-en* は、全ての形容詞に付加するわけではなく、**green-en*, **yellow-en* などの語は存在しない。この点に関しても、古英語の *-ian* は、一部の不規則な強変化動詞を除いて、ほとんど全ての動詞に *-ian* または *-an* が付加する。(6)に見られるように、転換した語だけでなく、英語に元からある本来語の動詞にも *-an* が付加しており、複合語にも *-an* が付加する。また、後から英語に入ってきた借入語でも同様に、北歐語から借入した *call*, *hit* など古英語の時代には *-ian* または *-an* が付加している。以上の点からも、*-ian* または *-an* は屈折接辞の特徴を示していると言える。

- (6) 本来語 : *bring-an*, *find-an*, *help-an*
 複合語 : *full-fyll-an* (*fulfil*)
 借入語 : *ceall-ian* (*call* 北歐語起源), *hitt-an* (*hit* 北歐語起源)

第三に、派生接辞と屈折接辞の順番に関しての特徴がある。(7)の現代英語の例から分かるように、同じ語に派生接辞と屈折接辞が付加する場合には、派生接辞の方が屈折接辞よりも語幹に近い位置に現れる。たとえば、*black-en-s* では、派生接辞の *-en* が屈折接辞の *-s* よりも語幹に近い位置に現れ、*destruct-ion-s* でも派生接辞の *-ion* が屈折接辞の *-s* よりも語幹に近い位置に現れる。

- (7) *black-en-s*, *destruct-ion-s*

古英語の場合はどうであろうか。*OED* で派生によって形成されたとされている古英語の例を確認したものが (8) である。(8a) の *brighten* がその一例で、*bright* に派生接辞の *-en* を付加して作られた語である。動詞または形容詞に接辞が付加して出来た語で、元が動詞の場合は *bright* が古英語では *beorhtian*、*brighten* が *beorhtnian* にあたる。*beorhtnian* の方は語幹に *-n* があり、3 人

称単数の活用形の場合にも、語幹に *-n* があることが分かる。元が形容詞の場合も *beorht* であり *-n* はないので、どちらにしても派生によって付加した接辞が *-n* だということが言える。同様に、(8b) の *glisten* では、元の *glise* が中英語時代に廃語になって現代英語には存在しないが、この *glise-glisten* の対応も同様の例として考えることが出来る。この場合も、元の語の *glisian* に派生接辞を付加してできた *glisnian* の方は、不定形にも活用形の方にも語幹に *-n* がある。したがって、現代英語の *black-en-s* の例と同様に、古英語でも派生接辞の *-n* の方が屈折接辞の *-ap* や *-ian* よりも語幹に近いところに位置しているということが出来る。

(8) a. *bright* - *-en* → *brighten*

不定形	<i>beorhtian</i>	<i>beorht<u>n</u>ian</i>
	to shine	to glorify
3sg	<i>beorhtap</i>	<i>beorht<u>n</u>ap</i>
形容詞	<i>beorht</i>	
	bright ; clear	

b. *glise* -*en* → *glisten*

不定形	<i>glisian</i>	<i>glis<u>n</u>ian</i>
	to glitter	1. to glisten 2. to glitter
3sg	<i>glisap</i>	<i>glis<u>n</u>ap</i>

また、動詞の不定形の接辞 *-ion* や *-an* は屈折接辞の内側に現れるわけではない。(9) に提示したように、仮に接辞 *-an* や *-ian* が派生接辞であるとすれば、動詞を活用形にした時に *black-en-s* と同様に、派生接辞と屈折接辞を並べて、(9a) のように 2 人称単数形は *lufian-ast*、3 人称単数形は *lufian-ap* と言った変化形になるはずであるが、実際は (9b) のように、*-ian* や *-an* は表面上には現れない。

(9) a. 2sg **luf-ian-ast* 3sg **luf-ian-ap* →

b. 2sg *luf-ast*, 3sg *luf-ap*

以上 3 点の事実から、接辞 *-ian* や *-an* は屈折接辞であり、動詞であることを示す接辞ではあるが、新しく動詞を作る派生接辞ではないと結論づける。このことから、転換は単に語の形が同じであると定義するのではなく、(10) のように、派生接辞がない語形成過程のことと考える方が適切だと言える。

(10) conversion is change of word-class without addition of derivational affixes. (Manova and Dressler 2005: 72)

(10) のように転換を定義すれば、古英語の接辞 *-ian* または *-an* が屈折接辞であるため、古英語の名詞と動詞の対応関係は転換だと捉えられることになる。

4. 古英語の転換と意味タイプ

次に、形態的特徴だけでなく *OED* で古英語の転換とされている語の意味タイプも、現代英語の転換で生じた語と同様の性質を持つことを確認する。(11) に見られるように、転換と接辞添加とを比べたときに、転換の方が出来た語の意味タイプが接辞添加よりも広いということが Nagano (2008) などの先行研究で指摘されている。

(11) the semantic domain of conversion is much broader than that of affixation, with the former including the latter as its subset.

(Nagano 2008: 27)

それでは、まず現代英語の転換には、どのような意味タイプがあるのか、Plag (2003) の提案を参照しながら考えてみよう。表 1 は、現代英語の転換で動詞になった語の例を 10 の意味タイプに分類したものに、日本語で意味を付したものである。表の左列から、意味タイプの名称、その言い換え、語の例とその意味を示している。たとえば、動詞の *jail* は名詞の場所 *jail* に入れるという意味になるので、locative という意味タイプになる。後述するように、この 10 の意味タイプの中で、特に名詞から動詞に転換した語に特徴的なものが、instrumental で、このタイプでは名詞の *hammer* が動詞の *hammer* になると、その道具を使って動作をする、という意味になる。

表 1 : 転換動詞の意味タイプ

意味タイプ	言い換え	例	意味
locative	'put (in) to X'	<i>jail</i>	投獄する
ornative	'provide with X'	<i>staff</i>	職員を配置する
causative	'make (more) X'	<i>yellow</i>	黄色にする
resultative	'make into X'	<i>bundle</i>	束にする
inchoative	'become X'	<i>cool</i>	涼しくなる
performative	'perform X'	<i>counterattack</i>	反撃する
similative	'act like X'	<i>chauffeur</i>	お抱え運転手として働く
		<i>pelican</i>	ペリカンのように飲み込む

instrumental	‘use X’	<i>hammer</i>	ハンマーで打つ
privative	‘remove X’	<i>bark</i>	樹皮をはぐ
stative	‘be X’	<i>hostess</i>	女主人役をつとめる

(Plag 2003: 112)

転換と接辞添加による語形成との意味タイプの違いを考察するため、Plag (2003:92-94) に論じられている動詞化接尾辞 *-ate*, *-en*, *-ify*, *-ize* など生じた語の意味タイプについての記述をまとめ、先程と同様に表 2 を作成した。

表 2 : 派生動詞の意味タイプ

意味タイプ	派生語	意味	元の語
locative	<i>hospitalize</i>	入院させる	<i>hospital</i>
ornative	<i>fluorinate</i>	フッ素と化合させる	<i>fluorine</i>
causative	<i>strengthen</i>	強くする	<i>strength</i>
resultative	<i>itemize</i>	箇条書きにする	<i>item</i>
inchoative	<i>aerosolize</i>	エアゾール化する	<i>aerosol</i>
performative	<i>speechify</i>	演説をぶつ	<i>speech</i>
similative	<i>cannibalize</i>	共食いする	<i>cannibal</i>

(Plag 2003: 92-94)

表 1 と 2 を比較してみると、接辞添加による語形成過程では、*instrumental*、*privative*、*stative* がないことに気が付く。まず、接尾辞を添加した語では *privative* がないが、これに関しては、*defrost* (霜を取る) など、接頭辞の *de-* などで除去の意味を表すことがあるので、接辞添加で表される意味の一つと判断して良いと考えられる。また、*stative* と *similative* の意味タイプは区別するのが難しいので、同じ分類のものと考えることとすると、上述したように、接辞添加には存在せず、転換に特徴的な意味タイプは *instrumental* ということになる。この転換における *instrumental* の独自性に関しては Nagano (2008: 27) にも同様の指摘がある。

上記、表 1、2 に示した Plag (2003) の意味タイプを用いて、*OED* で古英語の時代から転換したとされている 326 語 (2024 年 8 月 2 日参照) のうち、名詞から動詞への転換語 125 語を分類し、代表例を表 3 に示した。なお、転換動詞の意味は古英語の時代のものを示している。

表 3 : 古英語の名詞転換動詞の意味タイプ

意味タイプ	転換動詞	転換動詞の意味	元の名詞	名詞の意味
locative	<i>innian</i>	宿屋に泊まる	<i>inn</i>	宿屋
	<i>stigian</i>	豚小屋に入れる	<i>stig</i>	豚小屋

ornative	<i>fýrian</i>	火を与える	<i>fyr</i>	火
	<i>metian</i>	食料を与える	<i>mete</i>	食料
causative	<i>losian</i>	破滅する	<i>los</i>	破滅
	<i>rudian</i>	赤くする	<i>rudu</i>	赤色
resultative	<i>útlagian</i>	法外者にする	<i>útlaga</i>	法外者
	<i>martyrian</i>	殉教者にする	<i>martyr</i>	殉教者
inchoative	<i>mistian</i>	霞、暗さになる	<i>mist</i>	霞、暗さ
	<i>feferian</i>	熱っぽくなる	<i>fefer</i>	熱
performative	<i>lufian</i>	愛する	<i>lufu</i>	愛
	<i>wilcumian</i>	挨拶する	<i>wilcuma</i>	挨拶
similative/stative	<i>þeofian</i>	泥棒をする	<i>þeóf</i>	泥棒
	<i>wiccian</i>	魔女の術を行う	<i>wicce</i>	魔女
instrumental	<i>scildan</i>	盾で守る	<i>scild</i>	盾
	<i>fannian</i>	唐箕であおぎ分ける	<i>fann</i>	唐箕
	<i>hearpan</i>	豎琴で演奏する	<i>hearpe</i>	豎琴
privative	<i>heáfðian</i>	頭を切る	<i>heáfod</i>	頭
	<i>fugelian</i>	鳥を捕る	<i>fugel</i>	鳥

まず、意味タイプの種類に関しては、Plag (2003) が提案している意味タイプ全てが存在しており、現代英語と同様に幅広い意味タイプが見られることが分かる。また、*instrumental* の意味タイプがあるかどうかは転換にとっては重要であるが、*scild* (盾) を使って守る、という意味の *scildan*、穀物をふるい分ける *fann* (唐箕) でふるい分けるという意味の *fannian*、*hearpe* (豎琴) で演奏する *hearpan* などの *instrumental* の意味タイプの動詞が転換で生じている。以上のように、幅広い意味タイプの語が生じていること、中でも *instrumental* の意味タイプの動詞があることから、*OED* で転換によって生じたと判断されている語は、意味的にも転換の特徴を持つ動詞であると結論づけることができる。

最後に、転換と接辞添加との大きな違いとして、それぞれの語形成過程で生じた動詞に状態変化の意味が含まれているかどうか異なる、という可能性がある¹⁾。転換のみに見られる *instrumental* はその典型例で、動作の意味のみを表し、状態変化の意味は伴わない。Plag (2003) の意味タイプの中で状態変化の意味を伴わないものは *performative*, *instrumental*, *stative/similative* であるが、これら意味に状態変化を伴わないものと、状態変化を伴うそれ以外の意味タイプに、古英語の名詞転換動詞を2分類した割合を図1に示した。なお、本来は転換と接辞添加で生じた語の意味タイプの割合を比較する必要がある

が、今回は本稿で検討している転換動詞に対象を限っている。

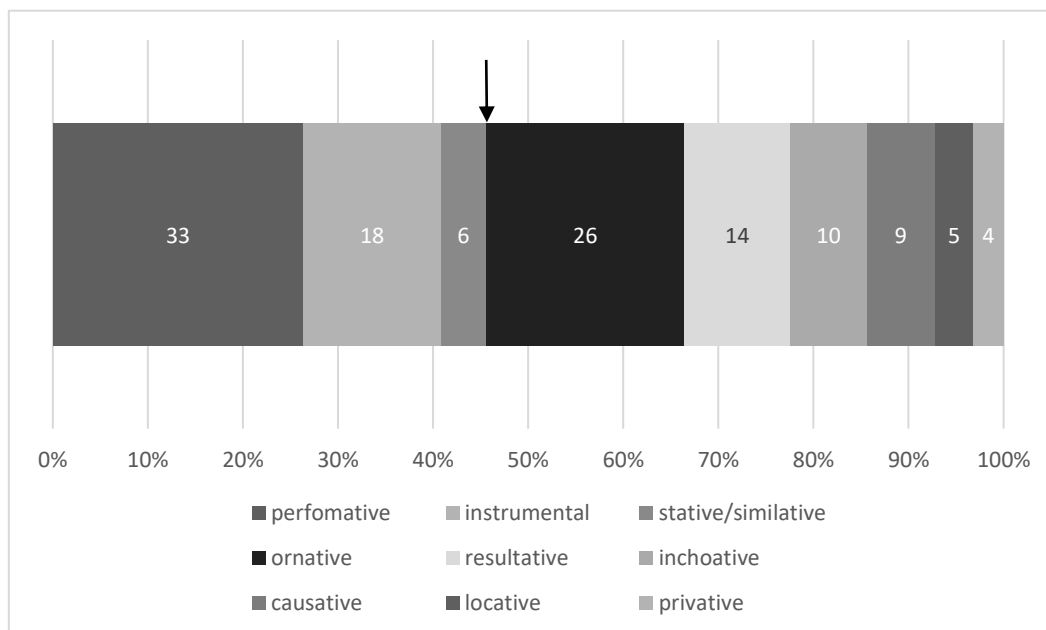


図 1：古英語の名詞転換動詞の意味タイプの割合

図 1 の矢印の左側が状態変化がない意味タイプの語、右側が状態変化を伴う意味タイプの語になる。名詞転換動詞の総語数に占める割合で見ると、状態変化がないものが 45%、あるものが 55%程度で、どちらも同程度存在していることが分かる。接辞添加には *instrumental* の意味タイプの語がないこと、接辞添加を引き起こす動詞化接尾辞の *-en*、*-ize* などが明らかに状態変化を伴う意味を表すものであることから、接辞添加で生じた語はほとんどが状態変化を伴う意味を表わすものであると考えられる。したがって、転換は状態変化の意味がある動詞もない動詞もどちらも生成することが特徴的な語形成過程であると言えるであろう。

4. おわりに

本論文では、*OED* で古英語の時代に転換で生じたとされている語の中でも名詞から動詞になっている語を中心にその語形の特徴、意味の特徴から古英語の時代から転換で生じる語は存在した、ということを論じた。

【付記】

* 本稿は、2024年9月14日に静岡県立大学で開催された *Morphology Lexicon Forum 2024* での発表原稿を加筆修正したものである。参加者から多くの有意義なコメントを頂いたことに感謝を申し上げたい。

【注】

1) 状態変化の重要性については、杉岡洋子氏の指摘による。

【参考・引用文献】

- Biese, Y. M. (1941) *Origin and development of conversions in English*. *Annales Academiae Scientiarum Fenicae*, B XLV, Helsinki.
- Haspelmath, M. (2024) Inflection and derivation as traditional comparative concepts. *Linguistics*, 62 (1), 43-77.
- 橋本 功 (2005) 『英語史入門』慶應義塾大学出版会
- Kastovsky, D. (2005) Conversion and/or zero: word-formation theory, historical linguistics, and typology. *Approaches to conversion/zero-derivation*, Bauer, Laurie and Salvador Valera Hernández (eds.), 31-49, Münster: Waxmann.
- Kastovsky, D. (2006) Typological changes in derivational morphology. *The handbook of the history of English*, van Kemenade, Ans and Bettelou Los (eds.), 151-176, Blackwell.
- Marchand, H. (1969) *The categories and types of present-day English word-formation: a synchronic-diachronic approach*. C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung, München.
- Manova, S. and W. U. Dressler. (2005) The morphological technique of conversion in the inflecting-fusional type. *Approaches to conversion/zero-derivation*, Bauer, Laurie and Salvador Valera Hernández (eds.), 67-101, Münster: Waxmann.
- Nagano, A. (2008) *Conversion and back-formation in English: toward a theory of morpheme-based morphology*. Tokyo: Kaitakusha.
- 小原 真子 (2024) 「Oxford English Dictionary で見る古英語の転換」『人間と文化』(島根県立大学松江キャンパス) 第7号, 131-140頁.
- Plank, F. 1994. Inflection and derivation. In Ron E. Asher (ed.), *The encyclopedia of language and linguistics*, 1671-1678. Oxford: Pergamon.
- Plag, I. (2003) *Word-formation in English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 辞書
- Bosworth Toller's Anglo-Saxon Dictionary online (2024) Available from <https://bosworthtoller.com/>
- Oxford University Press (2024) Oxford English Dictionary Online. Available from <https://www.oed.com/>